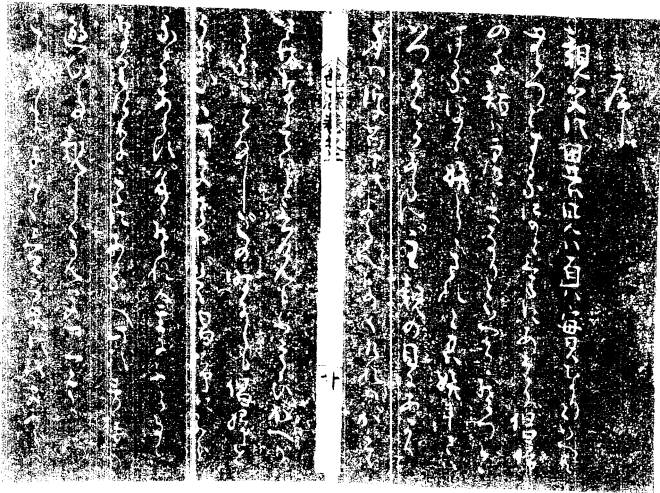


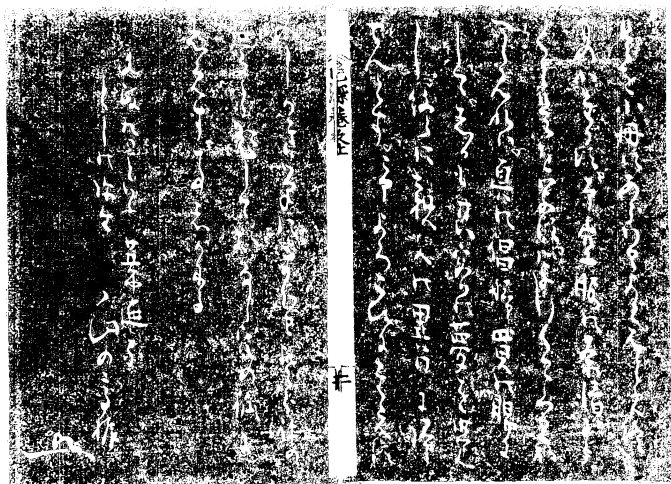


寸五	コヨ	紙	表
分三	テク		
寸七			
分三	コヨ	粹	文
寸三	テク	下	
分五			



序

親父の異見は眞實なりといへ共。むつとするほど氣にあたり。倡婦の千話は虚言なりといへども。ぞつとするほど嬉し。主されど其嬉しさはいつまでかあらん。主親の目にあまりて身は浮草のよるべくなれば。かたさまならではと言けんもふたゝびかへりみることなし。この時にしも。倡婦をうらむは何夏ぞや。是倡婦にふらるゝにあらず。たゞそれ金にふらるゝなりけり。こゝにある人此頃青樓に遊びて。親しく見聞一くだりのことあり。子



よく昼寐のひまあらば、是を小冊にあら
 わせよと。はじめ終をものがたりす。予空
 腹の茶漬さら／＼と是を寫す。寫しく
 てくりかへし見れば、眞に借婦買の賜に
 して、しかも其客の夢を覺し。終に親父の
 異見に歸せんとす。予よろこびにたえず。
 みじかき筆にまかせ。そらねの夢と題し
 て。おなし穴の狐にしめす事しかり。

文政九つといふ

としの彌生

葦廼家

の 高 振

印



古語に曰寸も長きとあり尺も短きことあり
 長羽織の古風あればみぢか羽織の當世
 あり野夫とばけものなき世の中ニぐつと
 ゑぐつたどんはらは筆の命毛賓客の鼻毛
 ながき話を短く書し芦屋がひとふしは名
 にし難波の骨髓とやいふべしこゝに江戸
 勤學の種春その巻尾を書たしひとつの小
 冊子となし此首に序せよといふに指くわ
 へんもいまましく短き才に長こしき劔
 鬨の費をやめ一寸さきはやみくもニ筆を
 とり五分もすかぬ顔するものは

寸も長きとあり尺も短きことあり
 長羽織の古風あればみぢか羽織の當世
 あり野夫とばけものなき世の中ニぐつと
 ゑぐつたどんはらは筆の命毛賓客の鼻毛
 ながき話を短く書し芦屋がひとふしは名
 にし難波の骨髓とやいふべしこゝに江戸
 勤學の種春その巻尾を書たしひとつの小
 冊子となし此首に序せよといふに指くわ
 へんもいまましく短き才に長こしき劔
 鬨の費をやめ一寸さきはやみくもニ筆を
 とり五分もすかぬ顔するものは

梅その主人









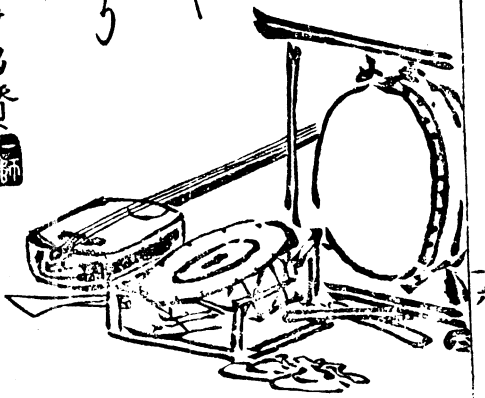
色紙巻下

梅柳

あふささや

百ちぢり

梅香画賛



深しほ色いろ採と睡ゆめ夢ゆめ卷まき之上

葦あし廼な屋や高たか振ふ速すみ
柳やなぎ園の種たね春はる枝え合あ

第一回

枚書まいがきおくる文月ぶんつきも。そよとの風かぜのたまりだに。かれ／＼になる虫むしのこゑ。ぬしは秋あきのいろかはと。おもひみだるゝ糸いとすゞき。ほんにこの身みがま／＼にもならば。雲井うんせいの丁ちやうに身をなさん。たゞうらめしき籠かごの鳥とりと。二上にじやうり哥がのひとふしを。隣となりの子こがいがひく三味さんまいも。わが身みのうへにひし／＼と。あたりてつらき夕間ゆふまぐれ。かげほそりゆく燈火とうしにそむけしかほやみだれがみ。ものおもはしきその人は。嶮あやの内うちなる大見おほみやに。名高なだかき若わかづめ大角おほかくとて。年は二八にじはちの色いろざかり。桃李とうりの良よや楊柳やなぎの。風かぜにさそはる姿すがたには。西施さいしも鏡かがみのかげを耻はぢ。小町こまちも

花はなのいろをうしなふ。今宵こんやは我家わがやに暫しばししがうち。かゑれど思おもひたえまなく。木津きづ甚しの客柳きやくりゆう輔すけと。きこえし人に去年こぞよりも。思おもはれ思おもふ戀こひ中の。いかなる故ゆゑか此こゝごろは。文ぶんのたよりもなか／＼に。ちかづらきの岩橋いわはしならでよな／＼の。ちぎりもたえて遠とほざとの。をのにおよてふ思おもひ草くさ。むねくるしむる折せからに。大見おほみやの廻まわし才助さいすけ。いそかわし門口かどぐちから。もし大角おほかくさん。早はやふこしらへなされ。木津きづ甚しからいふてきました。因ゆゑエ、何なにといひじや。木津きづ甚しからは大おほかた柳やなぎさんであろ。因ゆゑハ、嬉うれし。わたしかねんぐはんが屈まがいて。思おもひがかなふのじやあろ。一寸。

トたまげん。かんざし ちう。ほんにもしやなげて風かぜなきする。それかと心せき。とはよいふた事ことじや。さつきにから身みじまいしておいたらよかつた。トみまひ。因ゆゑト叶かなふか。かなわぬか。ゑい加減かへんなとじやあろ。因ゆゑいふてもおくれなさよ嵐あらし。トまじまいすみ。因ゆゑコレ其様そのさまにとばついてこけなさるな。それそこに石いしがある。嬉うれしいので足あしもとはおるすじや。因ゆゑエ憎にくてらしい。トたたく。其うち木津きづ甚し。みな。大角おほかくさまか。サア／＼おまいさんの念ねんが届いた。ちやつと二階にかいへいきなされ。因ゆゑさやうならおゆるしなされ。ト行いんとして才介さいけい。因ゆゑかしこまりました。外ぐわいに御用ごようはござりませんか。ト風かぜ因ゆゑ敷しきづみを。座鋪ざふの客きやくは大角おほかくが。こがれ／＼柳やなぎ輔すけなり。年としのころはいろ白しろく肥こえず痔ぢせず。脊せは少し高たかきかた。いやみなき色いろおとこ。もつとも當世とうせい風かぜにして。女おんなのよろこぶ仕立しだて。きつけはかはりじま越こ後ごちとみ。越川こし仕立しだてのくじらそび。ちられ小こもの箱はこの羽織はおり。すこ

しみじかく。きせるは油のはた。かみ入たばこい
 れはこれに準ず。まことに五アもすかぬといふこし
 らへなり。此人遠國よりしほし大坂にきたり。六
 木やといへるに逗留のうち愛にあそび。此大角に
 なじみたりものなり。此比はし。一坐の妓婦
 ばし遠ざかりしものと見えたり。

は酔熊の音。木津正の小貞。その外木津
 甚の娘象。仲居の露。うつき略す。

珍味をもちてならへ立。涼しくたゝえ
 し酒の池。肉の林に風通ひ。杯盤すで
 に狼藉たり。

音 哥へ一夜あはねばあ
 んじられ。いやな座敷もつとめのなら
 ひ合のべのやたでをかんざしに。むす
 んで見たり辻うらを。むりにあはせし
 鬘算合ねつみなきする心根は。かわい
 らしいじやないかいな。折からきたる大
 角が。かほかたちは先にもいひしどく。色あ
 いさやうこぼるゝばかり。この夜のきつけは。む
 て両きたる山水。帯は茶地の小きんらん。色米入
 の真田の上じぬ。かみはわけにゆひて。たいまい
 の櫛笄。同じかんざし六本。外にさんごじゆの

金けしかぎんしよとてりわたり。天津乙
 女おんなの影向せしかと。うたがはる。優うつくと
 して柳がそばにすはり。因いんお灸さんお
 久しう。ハイどなたも。トわざと客にはあ
 大角さん。どうかお久しい手。一寸あ
 げやせふ。トさかづき。因いんハイ。トうける。
 音ねコレハ旦那お久しい。ヤア大
 角さん。なんじや。うれしそふなお貞じ
 やナ。お姥さんじやないお灸さん。御
 きげん。くめヲ、おちいさんじやない
 黒ちんさん。おまへいつのまに御出た。
 きり物まで黒いよつて。ばんにはとん
 とわからぬ。高津の坂の下からお出た
 か。くまくまなにを。ト自分のあたまを
 に旦那。御盃をへ。いたゞきとふごは
 アります。柳やなぎなんだか。まづこは
 色と聞える。トさかづき。くまくまこれはあり
 がた。ありがたア。ありがたつかうは
 お灸さん。くめくめしらんわい。いつこい

かんな。くまくまいかんきん正氣さん。音ね
 エ、なをわるい。つゆつゆわるいなら。鯉八
 さんにかゝり。くまくまハアいやまづ虫下
 しを。一服。トぐつと。みなみなハ、ハ、ハ、と
 洒落の緒ほころびて。拳や声色いま
 様を。様々行ふ藝づくしは。干魚左エ
 門の作者よりも。皆様よくも御ぞんじ
 故ゆゑこれをり。くめくめ音さん小貞さん。むかひ
 が来ました。もふおしまい。音ねハイ。
 と返事につれびきの。三味線箱にたゝ
 みこみ。へ柳さんおありがたう。お灸は
 ん大角さん。と挨拶追従あへませに。
 てお入り立。つゆつゆ柳さん。ちとお休みと。
 いざなふ一問は雨となり。雲となる
 べき翠帳紅聞なり。柳は敷じごのうへに
 来たり。因いんようまあ今夜は来ておく
 れなかつた。トいひく帯をとく所へつゆ。
 寢巻のつゝみと茶をもつてき
 て。つゆつゆなにも御用事はおませんか。因いん

イエもふよろしい。つゆよなら御ゆるつとお樂しみ。トふすまをたてゆくとも。大角浴衣にきかへ。ひしごきくるくと俗き。そのまゝ。因もしへ。枕ひきませ紙をきて襦になり。此間はどふしてあないなぬをおこしなかつた。その時はあなた晝から来て居ながら。ア、腹わる。それに知らしても。わたしが来んことなのんと。ようマアいふておこしなかつたナア。柳なアにわつちのやうな者ア。来てもこなくつても。おめへさんは何もおさし支へなしサ。清さんだの。峠やの平さんだのと。色男のうへ。第一大坂のお人といふもんだから。わつちがやうな田舎もの。明日にもどつちへか飛びそうなものとは。違うはな。末はからすの鳴わかれといふ哥さへあるはサ。因又あんな皮肉いひなさる。この間もくどいほど。ぬにいふてあげました通り。もしやあなたが腹をたてなかつて。おい

でなさらんといふと。わたしや死でしまふ氣で居ました。どふぞそれまでに。一べんお顔が見たいと思ふても。行れんといふておこしなさるし。そこで木津甚のおばさんに。どふぞ柳様のところへ行たいといふたら。柳さんは兎も角も外のお方に悪いといふてじやし。それは／＼泣てはつかりをりました。柳そのつぎはどうだへ。馬鹿ものと笑つて居たといふことかサ。因エ、にく。つぶつり。柳ア、痛へ。おめへにつめられたは。外のものに撫られたよりヤアとんだ嬉しいサ。因其様に人のいふとを茶にせずと。マアとつくりと聞なされ。なんばわたしのやうなつとめする身じやといふても。そないに啜ばつかりつくものじ



上之巻 夢睡狂深色

やおません。ほれたお方なたと。ほれん人とは違ちがひます。どふしたもののやら。あなたには。はじめてあひました時から。千年も萬年もおなじみ申たやうに。はづかしい事もなんにも構まははず。またいろ／＼の夏なつ遣よちあけて。おはなし申ましたを跡あとでおもへば。定さだめてあなたがおさげしみなさつておるでなさるじやあろと。それは／＼案あんじて見たり。泣なて見たり。あなたの王わうを思ひつゞけて。外ほかのつとめはとんとうはのそら。團だんもとさままいると。しめす心だないかの。因いんア、いや。人ひとにはつかり氣きをもませて。じやら／＼と。もふこれからどふあつても。かうあつても。足あしのうらのまゝ粒つぶのやうに。かふして／＼。ひつついて離はなれません。上うへつとひきよせいだまつく。團だんそんなにしたら。わつちに罰ばつがあたつて。體ていがうごかれねへようにならアサ。因いんどふでもかまやしません。ドレ

此このおもしろ。ト柳やなぎの帯おびをとい。團だんコレヤもつとそつちへ寄よりな。あついはナ。因いんなんの。じつとおとおとなしうして居ゐなされ。トじばんも共ともひつしきまを。ね。のか籠かごの井いヘゴア、ン引ひ作者さくしや。ア、古ふるひもん句くだが氣きがわるくなつた。ト舞まのおちかくて

評ひやう曰いそれ人として一點いっぺんの情なさけなからんや。情なさけなきものは鳥獸ちゆうぶつにひとし。たとへ娼婦しやうふいかに實まことをつくさんとおもふとも。客きやくの心眞實まこと無なからんにおゐては。いつの時ときか其眞まことのあるべきや。もしまた勤ごん一いつ通とほりの客きやくなりとも。其客そのきやく誠まことあらんには。終つひに情なさけのいとすちにひかれて。眞まことの底そこに至いたる。娼婦しやうふもとこれ世間よかんの婦人ふじんなり。一朝いちやう千金せんぎんに身をあがなはれ。十年萬客じゅうねんばんきやくに情なさけを商あやふ。依よ而してその眞まことすくなきに似にたれど。却かへ而して能よく世情よじやうになれて。その怨あはなきもの

にあらず。只娼婦しやうふは。こと／＼くいつはりを以もつ客きやくをあざむくものとのみ心得たるは。大おほひなるあやまりなるをや。畢竟ひつじやうこの大角たいかく。柳やなぎに隔へするところ。下回げわいに説出せつしゅつすを聞きして善ぜん分解ぶんかいせよ。

第二回

陌頭はくず楊柳やうりゆうの枝えだすでに春風しゅんぷうにふかるとは。唐土たうどのちんぶんかんにして。いやな風かぜにもなびかんせとは。我われ日本の酒さけ落おなりけり。こゝは處ところも名なにしあふ。懸かと情なさけの中橋なかつはしや。ひく三味さんまいせんの道頓堀だうとんぼり。かいどる堀ほりもほら／＼と。雪ゆきより白しろき萩見月はぎみづき。遊あそぶおもひは極樂ごくらくの彼岸ひがんならで木津きづ甚おか。門かども賑にぎふ夕ゆふぐれすぎ。今いまおくの間の酒さけはて。店みせの間に寄よりあつまりしは。かの柳やなぎ輔すけが座敷ざしきにありし藝げい子こ。小こてい。ア、あつ。おばは今いま今夜こんやはようさしこんでおくれなさつた。みなイヤ

柳さんがおいでなさつたけれど。お内
の清吉さんとやら。國からついて来て
いなさる白鼠やかましまして。おい
そぎやけれどナア。あの大角さんが此
間から。いつこ待て居てじやよつて。
今夜はあはしましよとおもふて。其内
鳥渡御酒を出しますさかへ。おまはん
がたをしらしてあげたんじやいな。熊
それを此はながちやんとかぎつけて。
おこし遊ばしたといふものじや。熊
エ、すかん。熊アそれでしやわせ。お
糸さんに好れたらしまいじや。熊それ
はなんでエ。熊おとがゐで蠅追はん
ならん。熊ア、しつれい。どふでおまへ
のとこのやといどさんのやうな。好な
んとはちがひます。此熊吉つねん、自分の
女房を。やとい人とい

もふ。
みな ハ、ア。熊 それはそふと。柳

んど。ゆかりの月の見立があるが見
たか。熊 それ聞いていますけれど。まだ
見ません。熊 サアこれじや。熊 なんじ
や。閑よりつらい世のならひ。清吉其
次は。へおもわぬ人にせきとめられて峠
屋の平さん。こいつアゑらひ。いつこ
ゑら出來じや。熊 ゑいはづじや。四郎
さんは鶴廻屋の流れで。狂哥の御師匠
さんじやものと。そしれば影のさす月
と。俱に入くるその人は。これ別人に
あらず。大角にうちこんだる。峠屋の
平といえるものなり。年ころはよそじに
色あきぐるたして。少し目はまぢかひたり。その
上いやみたつぷりありて。みづから色男なりとお
もへども。後家の賈屋も受とりがたき代目物なり。
毎日毎夜。此邊にうかれて。あなたの青樓。こなた
の置やをまはり。多くは茶所店さきのじやまとな
り。おやまをよぶ時。座しきはなく。早くみづ
から寢間につて居るといふたちにして。しかも
大ふらにして。又ひつきき方と見たり。此夜の
みしやう付も。これにて睡君

みな
く ヲ、平さん

ん。サアおあがり。平ア、これは同行
来おそろひじやな。トずいとあがつて概は
これお象ばう。お預の番見るやうに。
ものも言すに大しけじやな。熊 ハアど
ふで。おまはんのやうなやうきなどは
違ひます。熊 サアちと奥で一杯きめう
てうらいとは。どふでござります。平今
までよそでなめら吞で来た。よしにし
よう。熊 そふじや。わたしとこの酒はあ
たります。そじやよつて平さんはいつ
も吞でじやない。平時に大角はこゝへ
来て居るか。熊 来て居て。平鳥渡あ
ひたいものじやがあはれんか。熊 今お
ねま。平客はだれじや。熊 したと
柳さんいナア。トわきむい。平ふん。つとしむ
て笑ふ。平ふん。つとな
る。此人大のやき。その内酢熊も木津正も迎
もちやきたり。ひ来る。熊 アイおはさん。平さん。御
ゆるり。ト兩人ともかへる。熊吉もはじ
レわたしも。平さん。さやうなら。熊

まあエ、じやないか。[熊]思ひ出したやうじがござります。内へちよつとかゑつて來ます。おみなさん。お糸さん。といふてかへると。あとはいよ／＼ものさびしく。大角のどむしやくしやと。はらを立たる峠屋に。仲居などはわきむいて。くつ／＼と笑ひ出す。おみなは出ぬせきをして。エヘン／＼とまぎらかす。[平]いつたい柳とやらいふ客は。おれよりせんからのなじみか。[みな]ハイいや。[つ]つ。[桑]ハイ。おまはんより後のなじみいな。[つ]一向か。[平]いつたいまアおれがなじんで居るに。外に客をつけるといふほどふしたものだじや。[桑]ヘア。おなじみもおなじみによります。全体そのやうにやかましい言なさるくらひなら。藝子をしなさればよいに。[平]おれも藝子も。これまでなんぼもしたものだじや。[桑]サア。さよじやあろが。

藝子じやといふて。お客ひとりといへば。又大ぶんむつかしいじや。いつたい大角さんに。そのやうに惚れてなさりや。身ぬきでもしてあげたがよい。そふでなければおまはん。娼婦のどじやもの。お客はとりうちじや。[平]おれじやといふて。大角ぐらい身ぬきしかねんものでもない。しかしあれが心底がおもしろうのうては。[つ]いふうち。大角二階より[平]髪をかきなでつゝ。手水に祈る。[平]髪を見かくれんとするを見つけて。[平]コレ大角。おれがこゝに居るのものもいはずと。[天]おまはんが來てなはるといふこと知りませんもの。[平]ヘエしらぬもすさましい。おれをちよつと見ると。そちらへ隠りよしようがな。いつたい柳とやらいふ客は。ど



ないに、よいかしらんが。たかゞ田舎から来て居る人なり。なにも格別のためにもなるまい。おれじやといふておぬしが、娼婦に出た時からのなじみで。わるいしうちをしたらといふでもなし。なんばもこれまで世話したともある。それに此せつは。おれがよんでもそは／＼とばかりして。其上こゝのうちで見せつけた。柳さんたら龍さんたら。あたげたいのわるい。いつその事されて仕舞かと思ふても。まさかおれがのいたら。跡でこまつておもひしるであら。因これ平さん。おまはん今夜はどふしたものでじやいなア。氣でもちがやしませんか。なんばわたしがやうなものでも。おまはんばかりがお客でもなし。されて仕舞なかつても。まんざら日の照らんことはござりますまい。トこのうちしじう。柳ねまをそつと出て。平イヤ。二かゝりより下のやうなを見て居る。おのれ憎くい事をぬかす。おれも男

や。すつぱりときれて。ふたゝび見かゑりもせんは。因よふきれなかつた。それでおまはんの男がたつてよかろ。ドレこれから柳さんとゆつくり寐ましよう。トつと行かふとす。平ドレこれしたるしに。と立あがる。ト其手をとつて。サア大角さん。おくへといふは。誰なるやと。みな／＼これを見るに。としのころは。茶の千すじのちちご。帯は花いろのはかたをり。けんぼうみちんざめの箱のはをりを着たり。すなわち是柳輔のとうりうする。八木屋の四郎といふものなり。大めア、四郎さん。いつの間に。四郎イヤなに。かのやうすはおもてぞ聞た。爰かまはずと。サア大角さん。因そんならよろしう。平なにを。トたちかゝるを四郎ち。四郎もふ何時

深 色 猿 睡 夢 卷 之 上 畢

じやあろナア。トよろしく幕。評曰。今大角のする所。峠屋をふつたる様子。真なるや虚なるや。峠屋もかくはづかしめをうけて。此まゝさるゝの心あれど。元來大角に於て。魂をとらかしたるものなれば。いかでか口にいふ所のごとくならんや。娼婦はやくこれをさとり。且柳の心をかたくせんがために。わざと柳にきかせて。かくなせしものなり。此後重て峠屋來らば。またことばを工みになさんには。いかでか財をなげうたざらんや。誠に三寸の舌頭兩人をころす。真に性をたつの斧なり。おそるべし。おそるべし。

深巴探睡夢卷之中

第三回

浪華の江南は。色をあつめ情をあきなふ所にして沈魚落尸のかほばせ。閉月羞花のすがた。家としてなき處なく。葦葉鱸鮓のあぢわひ。郷声衛風のしらべ。樓としてたくはへざるはなし。哥妓のかごしまはくわりんとなり。暫間のわらひはどんとひゞく。おくりむかの鴛鴦に千金の重きに似す。かりかしの花かつて不落のおもひをなす。されば一たび此地にあしを入れば。飛茶釜の藥籠親仁も。しののとふまくの鼻たれ儒者も。しんじつはれまじたのことはにほだされ。今宵は是非に御めもじのぬに魂をまきこまれ。家を忘れ身をわするゝにいたる。おそるべ

葦葉廼屋高振速 柳園種春披合

きは此里。つゝしむべきはこの迷ひなるをや。却説さきに出す所の二回。すでに木津甚の光景をあらはし。こゝにまた説出す所は坂町の風色を主とす。茶屋は女あるじにして藤屋の要。年の頃四十ばかり。むかしはそれしやといふと。細のつや葉のはへぎはにあらはれ。客をもてなす。とつよからずよはからず。五分もすきめなき所。もつともきりやう十ぶん。きしや七ツ下りといふかたびら。黒檀子の帯少しわたの出たる所あり。かた手にうちわもちながら。今さがりし鉢などかたづけさせる。こくげん。コレもふ。よそは四ツ時ぶんのことなり。名はす。ハイ。今見ましたら大かたひけました。要そんなら今夜は外にお客もあるまい。こちもひいたがよい。

と詞もいまだおわらざるに。入くる人はこれ葦屋の平にして。さきに木津甚にてもめ合。かんしやくまぎれにこゝに来るなり。要ヲ、平さん。サアおあがり。平はあ。とばかりにて臺所にすはる。要何じややら。あなたすまぬ貞じやなア。平いろ／＼氣のすまぬとがあるによつてじや。それはそふと音さんが見へんな。要ヘイさいせん木津甚へ花に居ておまして。あなたにもお目にかつたといふておました。いんまの先歸りまして。こゝにおりましたが。大かた手水にゆきましたじやあろ。トいふ手をふきなが。番平さん先刻は。トすはる。むすめにして。嶋の内すし熊のかりみせなり。ききに木津甚にて柳のさしき大角と一階なり。要マア平さん。ちよつと二階へ。大角さんしらしまじよか。平いや／＼。要なんでへ。平大角はもふさつぱりじや。要どふしてまあをないにいひなはる。平

最前木津甚に柳とやら。あいつがはれ
てゐる客が来て居よつて。そこへお
れがゆきあはした。声も聞て居るじや
あろに。ちよつとはあいさつに貸出し
てもよさをふなものじやに。おれの貞
見ながら。しらんふりを仕よる。それ
からつかまへてあれこれいふたら。柳
とやらに聞へるやうに。ほん／＼とい
ふてはちか／＼しよる。腹がたつてなら
んゆへ。マア手を切てしまふとはいふ
たら。勝手にせへとぬかすによつて。
おれのやうな結構なものでも。もう堪
忍がならん。なぐつてやろと立た處を。
八木四郎が来てとめたものじや。よつ
て。いまいしながら出てきたのじや。
[團]それはめつそうな。しかし大角さん
じやて。あなたは今やけふのなじみ
といふでもなし。それにはなんぞ譯の
あることござりましよ。[平]譯がある
かないか知らんが。あんまりじやない

か。[團]おはらだちは御尤じやが。それ
ざりにしなるといふと。何やら未熟
なやうじやござりませんか。そこはま
うべん堪忍して。よんでごろうじ。ど
うやらあの子が了簡あつてのやうにき
こへます。なに／＼もせよ。まあ二階へ
おあがりなされ。わたしは今大角さん
よびにやります。[團]いや大角は柳がき
て居るよつて出来やせん。[團]イエ／＼そ
れは最前四郎さんがちよつとお寄なさ
つて。なんでも柳さんをつれてかゑら
んならん。そのむかひに是から木津甚
へゆくとおつしやつてごあつた。よつ
て。大かた柳さんもいんで。ござりま
したであろ。これすまや。あふみやへ居
て来て。[平]ハイと出ゆく。[平]そんな
らお前の挨拶をきいて。まーべんよん
で見よか。トそれをしほに二かゝるへあがる。
[平]曰 峠屋も一朝のいかりにふれて。
すでに大角にふたゝびあはじとせ

しは。是のこゝろの眞にかゑら
んとする所なり。されどもかれい
まだ悟らず。ふたゝび藤屋へ来る
こゝろざし。更に大角に魂をの
こす所有。藤屋よくその機をさと
るがゆへ。言を工みにしてこれを
すゝむ。大角もまたよく。藤要よ
りよびに來らん事を知る。嗚呼堂
々たる一丈夫。なんぞ婦女子のた
めに木偶のごとくなる。
此處まはり舞臺といふ場にて。木津
甚の店となる。
八木屋の四郎。柳輔のむかひに來る。
柳助今夜は泊りたいといふ所なれど
も。よぎなくかゑらんと。今店出た
る處。大角おくつて出る。例のみな衆
などより合て居る。[平]今夜はいつこ
うお早ふござります。[團]わつちはとま
るつもりだけれど。清吉がやかましい
といつて。今四郎さんが迎ひに來たか

ら。顔立て今夜はけへるつもりだ。

カウ四郎さん。おめへどうか素面のやうだが。一杯やらかそふか。四郎 それもよろしうござりましょ。しかし遅くなる。よくござりませぬ。こゝでちよい暮とやりましょ。みなさよ／＼。そ

ふしておかゑりなされ。コレちよつとなんぞ。ト立ちゆき。おとは柳 サア大角さん。こつちへよんな。大ハイ。ト柳にひつ

し。二面といふ身にてすはり。柳が耳に紅のつかんばかりによりそひてさゝやき中ごまにて。今のを。といふてはづかし。四郎 ヲ、今の

間に。ト大角のたもとへ手をさしこむと。大角きにて。大段とおありがたふ。柳とふ

だか。ト大角うれしそふ。四郎 さん。おありがたふ。よろしうお禮を。四郎 母者ほどふじやへ。大泣そうなハイ。今日は少しお薬が通りました。といふ所へ。おみな玉子のかく切

あちやなどさかたてき。四郎 そんならおか持出るとはなしやむ。

ん見ませふ。トのん柳さんおはどかり。トす。柳また酒がうまくなつて面白く

なりそうた。因おもしろなつてきまし。たら。今夜はもふおとまりなされ。四郎

とつこい。そうはとらの門の金次郎とはふるいやつナ。柳ふるい飛切と。まづ御へん

せい。四郎 いんぎんかけねなし。トうけ。此御盃味おふて飲ませふ。それ大角さんのおかほの色こそなをつてはへ。トうたひのふし。大何

を四郎さんじやら／＼と。今いなし見屋の男。才介ハイ大角さん御むかひ。ますので。わたしやいつこしん氣でもなりませぬ。どふぞ清吉さんにあんじやういふて。おとまりなさるやうにしておくれなされ。四郎 拙者委細承知

まかりある。しかし若殿大切の御用を承りながら。けいせいとやらに魂を奪はれ。御用金をつかひ捨。只今にても御上使御逼着あらば。因 ヲ、すか



ん。みなとつと笑ふ。かゝる處へ大

ふしてもおかゑりか。どふぞあした来ておくれなされ。[二]どふか知れぬい。

[大]しれんではいなしません。なんでも待つて居ます。どふぞ四郎さん。あしたおこしましておくれなされ。[四]嚴命畏り奉ります。[大]エ、また。トたくみな

日那。四郎さん。おちかいうち。此時またまはり舞臺といふ場にて。藤要二階となる。

時すでに二更すぎ。處々のさはぎもやうしづまり。月落鳥なくといへる。楓橋の夜のすさまじく。姑蘇城外の鐘も聞へ。物ひそやかに聞のうち。

かの峠屋の平は。宵のことなどおもひ出し。とやかくとむねをこがし。大角今やおそしとまちうけたり。隣りの床よりもりくる私語を聞は。

[密]コレそないにびん／＼することはない。なんぼわしが坊主じやといふて。譯のわからぬとはしやせ

ん。[ひめ]ふりそと見へて。いま

なといひなはるけれど。ほかにふかいのがあつて。またこゝで大見

屋の大角さんに。なじみなさつたじやないか。

大角といふと聞て峠屋。平なんじや大角といふてる。こゝはさく處じや。トミをたてゝ居る。

[密]あれは姉からこつち。藝子の時よりしつてゐるゆへ。娼婦に出た

といふと聞て。鳥渡はいたのじや。そのせうこには。わしの連中の石

岡屋の清といふものにも。こゝでなじみになつて居るは。また其清

といふ男は。まどにかたい石岡屋であつたが。おれがだん／＼骨折

て。どふやらかうやら。角が大ぶんとれて來たら。その大角にはま

りこみ。内の首尾がわるなつて。今は來られぬそうな。[ひめ]それか

ら大角さんも。今では木津甚のう

ちに。柳さんといふお客が出來て。

これには大角さんがいつかうはれてじやそふな。[密]また木津甚とこゝとへ來る客の。峠屋の平といふ男が。大角にゑらふはれてゐるそうなが。これは又あつちから嫌ふ

といふとじや。

峠屋このはなしをさくより。いよ／＼あつくなる。[平]どいつじや知らん。お

れのをぬかしていをる。いま／＼しい晩じや。大角もまたゑらふ待たし

をる。もふいつこいでこまそか。いや／＼もつと待つてあふて見よか。トミををいれたり出したりしている。どふしておそい。いべんよんでせかう。

(編者記 原本は此處にて第二冊目終り)

手をたす。[すま] ハア引イ。ト来た。[平] コレ要さん
に。大角は来ませんか。いつまでまた
すことじや。あまりあほらしいよつて。
もうかゝりましよといふておくれ。

[すま] ハイ。トいふてお

作者曰。此一回すでにこと多く。
見る人退屈せんとをおそる。よつ
て峠屋平と大角との一篇をしばら
く置て。柳助家にかゝりしところ
をとかんとす。前後混乱するとこ
ろは。諸君子よく察したまえ。

第四回

迷ひゆく。心のやみや杵弓。ひくにひ
かれぬ義理となり。ともにこがる。夏
むしの。たとへ火の中水のうち。しら
ぬ越路のはてととも。つれてそはんと
おもひ立。あしもそごろに柳輔が。人
目をしのぶほうかぶり。さす雙刀も長
き夜の。秋風ぞつと身にしむは。夜も

丑みつになる鐘の声ゆび折は早七ツ。
柳さだめて大角がましかねて居るであ
ろ。もはやこゝが藤屋。どこもかもよ
く寐たか。かたつきり人声がしない。
どふかして此ろじの戸を明たしものだ
が。トひとり。それと聞とる大角

が。かねて今宵とやくそくの。
時刻もうつると先程より。峠屋
平が寢息をかながへ。しのび
／＼てろじの戸のかきがねはつ
し。柳輔にとり付。[因]柳さんう
れしい。とこゑ。柳さだめてこ

はかつたであろ。なにかのとは
みち／＼はなそ。見つけられて
は一大事だから。さあはやく。
とともに手をとりかけ出す。[大座]ラン
く。[因]ラ、こは。ト柳にとりつき。柳
いめいましい犬だ。これくらひやがれ。
トたもたらにぎりめしをほ。[因]あなた。よう
うり出す。大なきやむ。
そんな物もつてお出なはるな。[柳]知れ



あかりの夜や
花の
卯ぞく
園代井
物子画替

た。おらはかけおちにぬけ目のね
い男だ。[因]もしな。こうなつたはうれ
しいが。姉さんや藤屋様が。うらんで
じやあろし。またほんとうの母さんは
病氣なり。わしがゆきはがしれんと聞
たら。さぞ悲しがつてござりましたよ
なア。トなみだ。[柳]知れたこつた。おらじ
やといつても。養子にいつたみふんと
いひ。さきにいひなづけの娘があると
いふもんだに。それを捨てこうなると

いふこつたもの。てい／＼不義理な哀
だねい。しかしそんなまぐど／＼おも
つたといつて。あとのまつりだはな。
まづ。はやくあよびな。と太左衛門橋
をうち渡り。長堀ばしにさしかゝる。
おもひがけなきこかげより。大見屋藤
要のちやうちんともさせ。凡十人ばか
り。まつさきに六尺棒ひつさげ。向ふは
ちまきに一ばんきめしは。峠屋の平な
り。〔平〕おのれ柳助の青二才。大角の賈
女め。おのれらがのぶといしうちはか
ねての承知。今宵わざと藤要にとまり。
寡入た貞をまこととおもひ。忍んでろ
うじを出るを見をき。工みのうらをか
んと。裏口をまはり。此處にまちう
けたり。かねての戀のいしゆばらし。世
間へ顔の出されぬやうにしてやらふ。
まづ大角をわたせよ。のしりか、
れば。から／＼とうちわらひ。柳ことお
かしきうづむしども。みちを開きて通

ふせばよし。邪ひろがば息の
根とめんと。大角をうしろにか
こひ。身づくろひしてまちかけ
たり。大角はげがてもあらんかと。ふる
ひく／＼柳のうしろにかくる。〔平〕
とかくの論は無益なり。それ
一同に柳にかゝれ。おれは大角
をひきつれて。まづわが内でま
ちうけんと。声の下より大勢が。
柳助ひとりおつとりまく。今は
一生懸命と。かたなをするりと
ぬきはなし。大勢相手にいどみ
あふ。そのひまに峠屋はむりむ
たいに大角ひきつれ。橋を北へ
と走りゆく。八木屋の四郎は柳
助が。今宵のそぶりいぶかすと。
嶋の内へと來かゝるみち。長堀
橋の南に。人声もの音さはか
しく。スヘとなりと尻からげ。
かけ行橋の北詰にてべつたり出
あふ峠屋平。くらはさはくらし。



も日人に元ゆ君
のもらづたいのこぼまかのんな
路邊 手の手山 もとつた名きう

たがひにそれとわからねど。なき入女はたしかに大角。まづまでやらんとわきざしの。こじりを取てひきもどす。

扱はおのれも柳助がた。邪ひろぎなばコレかうと。するりとひきぬき切つくる。身をひねりつゝさそくのあてめ。女をひき立。四郎大角さんではな

いか。因四郎さんか。よいところへ。四郎して柳さんは。因今むかふに大勢と。四郎それこそ大事じや。おまへはあとよりと。いつさんにこそ飛でゆく。

橋の南は柳助が。秘術をつくしふせげども。大角の事も氣にかゝり殊に大勢にたゞ一人。今はちからもつきはてゝ。すでにあやふく見へたる所へ。四郎は

声かけ。我等これまでまいりたり。大切の御身に。あやまちあつてはならず。こゝは我等におまかせと。峠屋の落したる。六尺棒をおつとつて大勢の真中さしてわつて入。これに氣を得て柳輔

はかたなうちふりわたりあふ。今はみな／＼かなひがたく。雲を霞に透ちつたり。柳助ほつと息をつき。ア、よ

いところへ四郎さん。潮留もし／＼且那さん。なにをおつしやります。もしもし御目をおさましなされ。柳よ、

夜ふけがらすカア／＼。評曰 諺にいふ。聖人に夢なしと。聖人豈夢なき事を得んや。たゞおもひなく迷ひなきによつてなり。今柳輔。八木屋の座しきにかゝり。

夢見るところ。全く一心のまよひ々おこる。其癡情

黄河の水をもて洗ふといへども。清むる事かたし。人さよる時は。眼前のなすところ皆ゆめにして。ゆめもまた眼前のなす處とせば。



現夢さらに何の差別かこれあらん。かの莊蝶のたとへもこゝなるをや。今や此書に演るところ。夢物がたりの取ところなく。たはれたるさまながら。目をとめてこれをよまば。おのづから癡情のい

ましめとなるべし。いにしへよりいえらく。金言は耳に逆ひ。良薬は口に苦しと。肝をさかれ江に沈む。みなたゞ君臣の情を全ふする。こあたわす。いはんや當世の凡人。

かたくろしき書をよみて。而後しうしてんご
行ぎんひをあらためんや。わづかに目
をよろこばす書によつて。終つひによ
む人を諷諫ふうけんせんとす。これ則すなはち作
者の婆心はしんのみ。

深色採睡夢卷之中畢



序
 牡丹花下の睡猫も、音蝶も在る。花を愛らば、高振先醒の心花になり行。復縁となり。一酌の奇説を有。忽一小冊となし。書肆某をして、草堂に抛。編次を需る夏切。予柳巷華街の趣に聞く。頭蓬頭を撫るといへ共ゆるさざれば。先筆を執て。局を結ぶことゝはなりぬ。題して深色狹睡夢といふはかの青樓上の解始は。意金に在て。客を戀るにあらざるゆえなりと。心に口ばし

柳園種春

序
 牡丹花下の睡猫は。音蝶に在て。花を愛らばならず。高振先醒の心花になり行。復縁となり。南に飛で。一酌の奇説を有。忽一小冊となし。書肆某をして。草堂に抛。編次を需る夏切。予柳巷華街の趣に聞く。頭蓬頭を撫るといへ共ゆるさざれば。先筆を執て。局を結ぶことゝはなりぬ。題して深色狹睡夢といふはかの青樓上の解始は。意金に在て。客を戀るにあらざるゆえなりと。心に口ばし

柳園種春

色深狹睡夢卷之下

第五回

秋風の吹初てよりしら雲の。たつてふ天の川浪に。かけにし橋やかささぎの。みなみに飛で曉を。つげわたりたるかねのねに。やうくしらむ遠山の。黛凄き聞のうち。まだきえのころともし火を。かすりてそよときぬの。枕にかよふあさあらし。身にしみんと氣のつく峠屋。むつとおきて。至たしかに八木四郎。コリヤ大角をどふする。トそばにふしたる大角が。因アレエ、柳さん。ト大角は起なまつて。峠屋にいた。平そちや大角。因おまへは平さん。ほんにやつぱり平さんじゃ。トあたりを見。二人夢であつたかいなア。

この所南地ふち要の二階。今兩人

柳園種春編次

が夢見たるは。中巻の畢に話處の八木家にありて。柳輔が見たると同じ夢なり。亦覺たるも三人同時同刻にして。東方既白とする時なり。此大角。いかなる言を述て。峠屋が怨をととき。かく枕をともしなしたるや。そは左に解とて。因て善文解せよ。

因はんに柳さんにつれ出されて。至太左衛門ばしの北詰にて。因ハイ大勢にとりまかれ。平柳めが狂ふそのひまに。因おまへんと手をひいて。そつとはづして行先を。平邪アひろいだはたしかに八木四郎。因そんなら御前様も。平わがみも夢を。因ハイ。三人ふしぎとなア。平ヤこれ大角。今見た夢のやうすでは。そちややつぱり柳

めに。しんじつはれて居ようかの。トくみをきの茶を。因エ、なんとといひじや。トいひさまに平が右の。平アイダ、、、、、こり手へかまらりつく。

や何しやがるのじや。トよりはなせば。又膝にむしやぶり付。

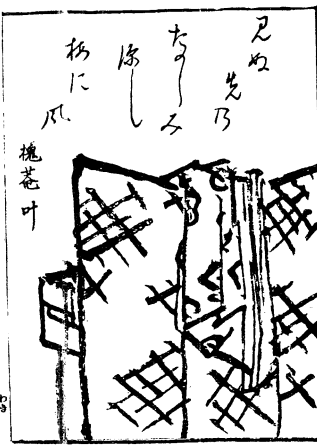
因コレ平はん。おまへはなア。トはせし涙はら。ほれたが因果じや。どふぞ身ぬきをしてもろて。どうしてなりとそふを樂しみに。これおまはんにもつとでも。苦勞をかけまいとおもふて。石岡屋の清はんに。三拾兩むしんいふて。

大方出来そふになつたを。あんまりおまはんが。やきもちゆへ。清はんもとりがした。其頃からあの柳はんが私にこりかけたゆへ。どうぞ逸さんやうにと。いろ／＼狂言かけても。あの四郎めがちや／＼いれて。どふもならんよつて。母様を大病じやといふて。此あいだ五十兩むしんいふたら。ねつから返事もせぬゆへ。どうじやまた。す

かゝしらんと。たび／＼ぬをやつたら。
 ゆふべ廿日ふり。木津甚へ来て。よ
 びにおこしたよつて。たゞみざんま
 して行て。寐た所へおまはんがおいで
 づ。私のとからお衆はん。かれこれ
 いふてじやさかい。わざと二階から下
 そうにして。心にもない愛想づかしを
 いふて。かわい／＼おまはんをてらした
 ゆへに。これあの邪人の四郎めが。五
 十兩といふかねを私のふところへいれ
 てくれた。こんな心配するの。どふ
 ぞ一日も早ふ。おまはんの女房じやと
 いはれたらばつかりじや。それにゆふ
 べも矢のふるほどよびにおこし。やう
 ／＼柳をいなして。おまへにあふて。
 此かねをわたし。身ぬけの相談をしよ
 うと。たのしんで飛立ように來たのに。
 人の心もしらすいきなりにふんだり蹴
 たり。ごないに鬨までへたばるやうに。
 うち打擲。あのお要はんや。音はんが

わけておくれんと。殺されるのじや。
 此かねを見せて。わけをいふたら。や
 う／＼ときげんをなをし。寐て中なを
 りして。うれしやと思ふ間もなく。夢
 を見たが氣にいらぬと。またいやみの
 たら／＼いふて。私を術無がらすのか。
 御前様なんで其様にじやけ
 んになりなはつた。コレ此む
 ねが割て見せたいわいなア。
 小平のひざにと。匣おれもわが
 リつぎなく。みみ狂言じやあると思ふ
 てみたけれど。木津甚のや
 つらがおれをしゝいなしに
 いなしたさかい。つい癩癩
 がおこつたのじや。それに
 わがみおれをそでにして。柳の十部一
 も。おれにかまはぬゆへ。何やかやで
 ついおこつたのじや。因なんのまた。
 客あつかうやうに。あなたじやの。佛
 壇様じやのと。あたしら／＼しい。ま

だけいせいじやと思ふてからあきれる
 わいなア。ほんに粹のやうにもない。
 あんまりあほうらしい。トきせるを打
 てるは。もふ料簡しい。おれが惡かつ
 た。因エ、知らんわいな。はらいつば
 い人に氣をもませておゐて。いつでも



がみに客をすりおろさせ。そのかねで
身請したといわれては。今込みがいた
かほがよされる。わがみの志はうけ
て居る程に。マアこれは取ておゐて。
小遣ひにでもしい。おれも京の得意に
五十貫目といふものたをされ。そんな
とやかれこれで。わがみの身ぬきもの
び／＼になつたのじや。したが其くめ
んもしておゐた。かねてはなす通り。
浮世小路にちよつこりしたゑい座しき
をかつて。神棚から。火吹竹まで拵へ
さして。ちやつとはいるばかりにして
ある。わがみの簞笥も二棹まで貰て。
きれいにすえてある。けふはそのかね
が出来る日じやさかい。これからいん
で。取引して。あしたはわがみの親方
にかねわたし。すみやかに身うけして。
柳のいなかもや。八木四郎の毛唐人
やら。木津甚のやつらの。鼻をひしし
でやるは。困わたしや嬉しい。そうし

たら柳は氣ちがひになるじやあろな
ア。なんの小づかひもいりません。入
時はおまはんにもらふさかい。どふぞ
家のたしになとしておくれ。ト五十兩
は平のそ。困わがみいらすば。母者の
寺參りのさいせんになとやりや。エ、
どふしても。おれが手にとると男がす
たる。トむりに大角がふと。コレちよつとこ
ちら向きや。あたまは痛みはせぬか。
困なんのぬしにたうかれるは當りまへ
じや。おまはん。手はどうもなりやせ
なんだかへ。困かゝの口疔がついてあ
る。困ア、うれし。ト平にいだきつぎとん
るを。隣にたまりしら、引ア、引トのび
坊主客めをさまし。困コレおまはん。ゆ
めをさまし小聲にて。困ふべ悪いこと云たなア。困隣に居たの
はその平さんじやあつたそうで。大角
が来てから。ゑらせりふじやあつたな
ア。困そしつたとを聞いてゐてじやあ

たじやあろよつて。目のさめぬうちお
歸りなはれ。困そふじや。また今夜來
ふ。誠に口をして鼻の如くせまじや。
トこはそふにして羽織きて段階子をそつとなり。
茶の下をたいてみるおまよばに。はきものなをさ
せ門へ出る。此女郎。いさきへかくくく

このとき夜はほの／＼と明はなれ
て。藤裏の門をすぐる一人の男あ
り。頭に狐色の手拭ひを頂き。身
には古布をまとひ。朽かゝりたる
草鞋をはき。兩手は懐にして。股
谷に在。兩の古桶荷ふの棒。肩に
ちよんと乗て。如天秤。秋風に嘯
てうたひ行。其詞曰。

悦 涙 闊 情 濃 則
我 意 雖 眞 大 快
亦 想 對 余 人 如 此
怒 氣 如 烈 火 然 也
是 理 哉 々々々
是樓上に在處の大角が意中に徹
故に別に評をあげず。抑これは

何人ぞや。神か道士か。作者善是
を知。難波の邑人。尿買良が流行
戯哥を唱へて通行しならん。

第六回

炎景剩残衣尙重とは。秋のあつ
さにたえかねて。紀の何某がつらねた
る。言花剩残頃尙暑と。筆がすべ
つてしやれ衣。うらふさかへす涼風の。
やう／＼かよふ未下刻。しのびてすだ
くまつむしの。むし所てふ今宮の。む
し湯と名にもたつけぶり。まだ入相に
とふ寺の。かねてまつとはやく／＼の。
二こしさすがものゝふの。にぎはふ門
をしるべにて。入来るは。年のころ三十
四五侍いるあ
さぐろく。柔利にしてふんべつららしき人物。ま
ごに見まがふなら船にもじの羽織を着したるは。柳
助が國からの付人高瀬清吉
なり。中居あんないして。仲あよふおこし遊
ばしました。ト茶たばこはん まだいかふ
などもち出

暑さにござりますなア。直にお湯へめ
しませんか。そのうちにさゞをあげま
せふ。西イヤ。つれが二人今にぐるか
ら。參つたらこれへ案内さつしやれ。浴
衣も三ツ出して肴もそのつもりに澤山
出さつし。先湯へはいりやせふ。ト手ぬ
さげて湯へゆき。しばらくして出きたり。團圓に
てあをきゑると。中居さけさかな涼しく仕立て
持ち出ると。清吉は仲居に酌さしひとり飲みかけ
居る。此隣さしきにも客ありと見へて。わらふ聲も
聞へ。はなしの聲ふす。女の聲へコレ。其様にお
ま一爪をぬる。づ／＼する衷はない。ころでおごつた
所がせいさい一兩じや。五十兩あるは
な。男のこへハ、そふじや。ト手をた、
[下女] ハイおよびなさつたか。[男] コレも
ちつとおいしい物。たんと出してお
くれ。[下女] ハイ。ト行。[男] あの
柳助といふひがは。まだ土けがはなり
よまいがナ。[女] いづこいやみじや。
しかし船屋よりましじや。ト柳助といふ
こ。こ。清吉

ふしんで。仲居に。團となり居るほどこ
むかひ小ごまで。[男] とになり居るほどこ
のものだ。しらないか。[仲] 小聲に あれ
は大見屋の娼婦大角さんたららふよので
おます。すつかりとしてよいお子でお
ます。トこれを聞。[西] コレてまへ。用があ
ます。ト清吉。
おありがたふ。畏まりました。ト立てゆ
くとに清吉ふすまのすきより隣の座敷をうかがへば
客は二人。一人は若づめのおやま。一人は年の比
二十のうへを二ツもこしたるとおぼしき男。顔の色
あくまで白く。眉はほそく一文字につくり。少し
千世がたちにてかみは水すきにして。わけ細く。
ものいふとき。あらはる。齒は白きごいなをな
がべしどし。水のたるごくみがかきしすがた。こ。こ。解
がすりのひとへもの。はかたの帯をかいの口に
むすび。すこし胸まくりして。女ともたれやい。
酒飲み打けうじて。ヤ、うたけなわのおもむき。女
も小紋のゆかた。むらさきのぼを帯。しだけな
きていにて。雪のはだへあらはにして。至を兩方

から口そへて飲みあひ。あるはよろこび。あるはさしやき。水もらさじと語らふありさまなり。清吉は息をつめてきゝゐる折から。仲みがひそかにあんないして。あとから来たる二人のつれは。柳助八木四。四郎 清さんお待とど。清吉こ

へはどふして。酒 アコレ。ト手にてしづし。かたして。ひそかにこゝから隣座敷をのぞけといふしかたするゆへ。兩人のぞき見てきもをづし。四郎 あれば大角めと。たしかに廻し

の才助めじや。四郎 コレ静に。トせいしいきをころして。オ コレゆふべ峠屋めがゑらもやしで。火のやうになつていよつたが。おまへ。どうして仕舞をつけた。

何かなしに。此かねをめささへつきつけ。眞夫ごかしに。腰をぬいてやつて。どうがらをたらかした。ところがおかしいとは。同じやうな夢を見たとおもひ。そふしたら。またもん句つけて。いやみをいふさかむ。粹ごかしにして。又此かねをつきつけたら。ほしうてた

まらんのじやけれど。わしが腹でいく

もんじやよつて。母様のこづかひにせといふてわしの懐へいれよつた。そしてただけふ中に金くめんして。明日は親方様にかひ合て。わしがみぬきをして。うき世小路たらいふ所へ。かこ

うといふてゐる。オむまいな。因 そうすると。呉服屋香具屋をよびつけて。おもいれ買込それをみな

まげて。ゑい道具はみなぬかして。おまへとふたり夜舟で。ほいとこさやるは。因柳めにもつとおろしてやりたいな。因ゆ

ふべあのくらひかまかけて置たよつて。大方今夜はくるじやあ

ろ。わかれに紙入なとおろしてこませ。オ コア、そちが柳をかける時は。まことに眞實のように見へる。いかなおれでもおりに。迷ふてむつとするとがあ



る。因 したたこと。そのくらひにせにや。今の客はおろされん。オどふでの時もおもひやられる。因しらんわいなア。まあこれくて。せいでもつけい。ト玉子のあつやきはさんで。才介が口にいれ。その牛ぶんを自分が口へいれる。オち

くしやうめ。トぐつと。拍手にこな。どにしり居にたふれ。清吉小庵にて。酒 ふらちなやつなア。

(編者記 原本第四册目此處にて終り)

大角才助の兩人暫らく無言なり。

此間何ごとをか談じ。何事を行

ひしや。作者もしらす。唯隣の三

人。惘て戻餅搦たるぞおかし。

やあつて大角 困 てんごうしいな。トつ

たりわ 困 まべんゆへはいろか。

困 洗ふておひで。困 いかけていこ。

困 洗したとを。今のはあるか。困 これ

におはします。風呂場迄持参せう。トき

ふに入て。首にかけて。二人づ 困 なんど柳

さん。ごろうじたか。困 いやはや。とん

だ女郎子だ。困 サアこれにておもひ切

て下さりませ。困 女郎といふものな

ア。眞實はれたと見せても。皆あの通り

なものじや。あの大角めは。戻もけつ

も。丹けつのかたまりじや。木津甚じ

やの。藤要じやのと。皆女才のない茶

屋じやよつて。柳さんに深入りさんの

じや。悪い茶屋じやあつて見なされ。

遠にだまされなさるのじや。それでさ

へ昨夜夢見がわるいよつて。是非とも

今夜きやつにあひたいなど、おつしや

るゆへ。内々清さんに吹こみ。このむ

しゆへ先へまたせおひて。あなたを

連れてきてごむけん申そと思ふたに。ね

がふてもない古たぬきの穴の底を見ぬ

いて。化の皮を御ろうじしたも。困 全く

四郎さんのしんせつが届いたのじや。

困 たとひ又。柳さんがうけ出しなさ

つて。くろがねの網を張て。おきなさ

つても。暮じやないが。いつの間にか

ら出て行ます。困 これにてとんとおも

ひ切。早く御飯國あつて。御娘さまと

御祝言なされませ。困 だん／＼の異見

過分にぞんする。これまではあの賣女

めにまよふて。實は耳にはいらなん

だ。今日只今夢さめて。四郎さんの手

めへも。面目無へ。早く國へ飯り。母

にも罪を詫ませふ。困 あやまつて。改

むるにはゞかること勿れサ。若旦那よ

ふ思ひ切て下さりました。それでこそ

飯で合すかほもあれ。しかし奥様が内

證にて。路用のたしにもと下されし五

十兩。あのやうな賣女とはしらす。手

ぎれのためと四郎さんを頼みくれての

けたが。思へば潮に捨てたも同前。もつて

へねへ。困 ナニ犬にくはれたと思へば。

きついでアねへ。これから女郎買やめ

たら。一月の内にやア。五十兩とりか

へすはサ。困 いつてもあまり馬鹿げ切

て居る。困 そこらはぬからぬ此八木

四郎。マア。きやつ二人が爰の仕舞

を見ておなされ。妙けれ、つといふ世

界になりやす。先一ばいのみませふ。

ト三人のんで居る所へ。大角才助海よりあが

りしと見へて。となりざしきだこある。困

ア、さつぱりした。困 おきんか。風呂

の中でも。ことして。素人らしい。

トいひながらうち。困 もふ夕暮じや。そろ

/、しやばへ出ようか。まんまと一日身あがりなされた。因五十兩あるじやないか。[才]五十兩づかひがあらいな。ト手また[下女]ハイお呼びなさつたか。[才]つけおくれなされ。[下女]ハイ。ト立てゆた。お湯の代も一處にして。三十八匁五分になります。[因]そんなら今のうち一兩あげてつりもらひ。[才]そふじや。トかの五十兩の封をき。此内取てあと貳朱でおくれなはれ。トヤにさがりに煙管をくわかほでいる。[才]もしこの小判はいきまかせに女來り。[因]もしこの小判はいきまかせん。かえておくれなされ。ト一ことにい[才]何のいかんごがあるもんか。[因]それでもいませせん。[因]エ、外のとかへてやりいな。たんとあるじやないか。[才]エ、邪アな。トまた一兩出してかえてや[下女]二人とも着ものきかへてかへる支度してある所へ。むし湯の銀湯と見え。三十ぐらひなものをいひせうな男。しほりのゆかた着たるがuscita。[因]コレ此かねで爰へぞる。名は吉兵衛。

めきに來たのか。一べんならず二へん造。こんな戎金をつかまそと思ふて。人をくそにしたような。あほうらしい。トかねり[才]エ、何といひなはる。おいらをこんな者と見すかして。こりやぐするのじやな。トきつと[因]ヤいふんどしめ。どうみやくを拂ふよつて。かえておこせていふを。ぐするとは何のこつちやい。此金に戎三郎とかいてあるがおのれが眼にやよめんか。へげたれめ。ぐづ／＼ぬかすと。引く／＼つて大見屋へつれて居て。親方の前でござそよ。トこれを聞く才介あつくなり。残り[才]ヤアこりやみな今宮じや。[因]エ、なんといいひじや。トさしものけつの大角。[因]そんな芝居のやうなといはずと。きり／＼算用せいのなけりや着物など預方かい。トやつなつてゐるところへ。八木四郎殿からそつとまはり。いまたやうなかほして二人の座しきをのぞ

[四郎]吉こなんじや。ざは／＼と。トずいとあ[因]ヲ、四郎さん。[四郎]大角か。たれと來た。[才]旦那へい。ト片胸へよ[四郎]吉子どふしたのじや。[因]八木屋の旦那。聞ておくれなはれ。此二人湯に入てたらふく飲んだり食たりして。拂ひしませんは。またそのうへに此どうみやく。[四郎]ヲ、大見屋のか、への大角。よふ知つて居る。つけはなんぼほどじや。[因]たつた卅八匁五分でござります。[四郎]こゝへ來かゝつたがのんぐわじや。おれが拂ふてやろ。ト金二兩出し[因]こりや多ござります。[四郎]あちらと一處にして。またあまつたら預つておゐてたも。[因]ハイ。ト才助がめさき。コリヤよふ見い。これがほんまの小判じや。べらばうめ。われの出よふがよけりや。平生見るかほじやもの。なんの二ヶ月も。三月でも。かけてやるけれど。

逆ねだりのやうなことぬかすから。とらにやきかんのじや。八木屋の旦那を拜んで居い。四郎 コレ吉こ。こりや大かた大角が。どこぞの客にむしんいふて。もろたのじやあろ。其客めが。こんな内證のわけも知て居る人でわざとうらかいて。今宮をつかましたのじやあろぞい。直そんなとでござましょよ。何じや知らんが。ふんどしと。ほんかりにくるは。せうじの事じや。旦那おありがたう。ト立て行。大角 四郎さん。いつの間においでなかつた。四郎 今來たのじや。ちよつと行てこふ。ト庭にをりへもどる。才助大はだぬき。大角をつて引す。オ ヲイまいぬけめ。よふぬけ／＼とこんなどうみやく握まされて。おれに耻をかゝしたな。それになんじや。心配したの。イヤ此くらゐにせにや。今の客はおろされんどの。なんのと。一体さつきにから。五十兩

／＼と大ふうな事。つくしやがつて。あたいまいましい。ト腹立まされにつきとばす。とたんに隔のふすまへあつて。ばつたりこけると。隣ざしきには右の三人。この世界をさかになしてゐて居る。大角びつくりして。イヤ柳さん。四郎さんもおまえはなア。トはぎして無念のありさまに。四郎 コレ大角。びり／＼するとはない。かういふと見ぬいたゆへ。清さんから請取た五十兩はなをしておゐて。十日戎に店のものが買てきた五十兩を。一寸作してくわせたのじや。そのかはりにこの拂ひはしてやつた。柳さんもかくやを見てからお



國へおかえる氣になつた。其祝ひや何

やかやに。これだけおれがもうてや

るは。ほんとうのじやぞ。ト金三兩出

てやる。なげてる。

因 因 因 そんならさつきにからの。ふたり

の話も。柳、皆開た。因 因 エ、い、い、

トソリか。因 因 ハテ扱。柳さんも。清さん

も。近よ國へおかえりなり。またよその

夏を聞たとて。手がらそうにふれある

くやうな。八木四郎じやない。又ここの

吉じやとて。商賣がらじやもの。こんな

とを世間へは出しやせぬ。おれもまた

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

味様いふてやるは。トさしもの二人もあや

りじや。きりやう次第だましてとるが。

娼婦の業じや。峠屋の終は。後篇に

知りよぞい。因 因 そんなら何でもこれ

切で。因 因 ハテ扱。そんな事をいふて。

くがいの妨するやうなおれじやないは。

因 因 エ、有がたふござります。ト三兩を

いてふところへ。さやうなら柳はん。四郎は

ん。ハイあなた。ト清吉にまであいきつて。二

は見やは。柳四郎清へハ、い、い、サア目出たふ

笑ふて飯やせよ。幕

評曰それ入此道に走る則。駒馬とい

えども追事かたく。蘇張といへ共

諫留ることあたはじ。大角が姦智

も。密夫の姪におぼるが故に。其

隣あるをしらす。危哉柳輔。八木

四郎無かつせば。遂に虎穴に陥

て一生をも。誤べかりしを。清吉

が精忠美鬼神を感せしめて。以て

が精忠美鬼神を感せしめて。以て

が精忠美鬼神を感せしめて。以て

が精忠美鬼神を感せしめて。以て

が精忠美鬼神を感せしめて。以て

間此一席に導。狐狸の穴底を

見せて。其妄念を断せしものか。

然なき則。清吉が諫言も。徒に馬

耳風に比し。八木四郎が異見も争

微べきや。智有人の惑ひ初たるは。

却而愚なるよりは増りて覺ゆ。大

角いまだ甘に満ずして。能壯士を

轉ばす事。須此道の豪傑。巧言

令色を以。客をひくは。娼婦の業

とし言は。亦憎むべきにあらず。

謀らるゝがあしきや。古語に

曰。青樓には遊ぶべし。青樓には

苦しむべからずと。是微妙の場に

して。遊客最熟練すべき言な

り。今聞八木四郎。善此場を踏な

に遊で苦しまず。然も通と賞せら

る。彼子房が死せざると同じ。大

角が姦謀を看知て。忽一計を施

し一度兩人を苦しむるといえど

も。柳輔が意本に飯しを見て直に

も。柳輔が意本に飯しを見て直に

も。柳輔が意本に飯しを見て直に

田金三片を投じて。窮を救ひ。將善情を感じて事を無事に治めたるは。客の客たる所にして。是らをや粹といふべけれ。亦其家が所作は。あくまで恪自通と慢而。姪を恚にす。故に己を顧事あたはず。遂に一娼婦の爲に。家財を抛にいたる。是らをや悪人とはいふべし。嗚呼。慎べきは此一道なり。一度紅唇を開け。黄金掌に集り。泪霏すれば。白銀懷に溢。家を捨身を零落も皆一婦の舌頭より起る。おそるべきもの彼が手管。清女がものゝ中とはいいかでもらしぬらん。一家の主たる峠家。將柳輔が有福なるを捨て。無宿の才助に身を任せたるはいかにぞや。こは大角の身にあらず。或は富家の手生となり。身には錦繡をまとひ。望心に任すといへども。

いつしかに其幸を抛。髮結髻間の類ひに身を任せて。貧一生を過して。果は小町と類するたぐひ。あげてかぞへがたし。謂所牛は牛づれにして。樂亦其窮中にあるべし。然れば娼婦。強に金に恍惚ともいひがたし。只其情を慕ふものや。されば青樓に遊ぶの人。その情を愛して。その色には更るまじき。嗚呼難哉此言。只慎しむべきは居續け。いましむべきは己惚なりけり。

深
色
採
睡
夢
卷
之
下
大
尾

高ふはムリ升れど御免のかふむり升て是方口上をも
 つて申上りこれに扣へ升たるは江戶御ひいきの歌
 川國貞が門人歌川貞春と申升る者ムリ升るいまだ
 若年にムリ升れど繪の道至て執心にムリ升て相改め
 升て五波亭へ門入いたし歌川の苗字をゆづられ則五
 波亭といふ号をおくりくれ升たるやふにムリ升私事
 も御當地へのぼり居升れば貞春御引合せの口上を頼
 み升るゆへにまだうい敷私さし出がましきいか
 と差ひかへ升たれど朋友の中にも別懇の國貞が
 弟子の儀にムリ升れば貞春が改名の御披露を申上た
 てまつり升末は御取立を持升て浮世繪師似顔画工
 の教にも入升るやう何卒御最願のほどを願ひ申上
 升る先は歌川貞春が御目見へ口上さやうに思召下さ
 れ升ふ



明友け中こそ別懇の國貞が弟子の儀にムリ升る貞春の
 改名の御披露を申上たまつり升末は御取立をおしけ
 繪師似顔画工に教にも入升るやう何卒御最願のほどを願ひ
 申上る先は歌川貞春が御目見へ口上さやうに思召下さ
 れ升ふ

花笠文京

おむえ津乃梅の苔のかうばしく
 春のめぐみに名をやひらかん
 歌川貞春
 御ひいきをたのみにすだく青蛙
 両手つくしの筆のとりぞめ

花笠文京

なに津の梅の苔のかうばしく
 春のめぐみに名をやひらかん
 歌川貞春

浪速

葦廼屋高振 著述

江戸

栞園 種春 校訂

江戸

歌川 貞晴 画圖

全

和田正兵衛 執筆

文政九

江戸日本橋磁石店

大坂屋 茂吉

丙戌年

名古屋中下樽屋町

玉野屋 新右衛門

三月吉辰

京鎭藥師高倉西江入

山城屋 佐兵衛

發兌

肆

大坂心齋橋通博労町南江入

河内屋 茂兵衛